



(写真右から)住谷さんと原さん。

臨床も研究も垣根なく融合させることで広がる可能性 自ら考え行動する若い力を手厚くサポート

大学院医歯薬学研究部医学域 教授 **安倍 正博** 研究室
◎ナビゲーター 大学院医科学教育部 博士課程医学専攻 4年 **住谷 龍平** (すみたに りょうへい)
大学院医科学教育部 博士課程医学専攻 3年 **原 倫世** (はら ともよ)

髄腫になるリスクも増加し、ここ数年でいろいろな薬が出ていて、元気になる人も増えているそうですが、完治は難しく、何が原因で発症するのか、なぜ発症するかといったことは分かっていません。住谷さんは今年度前期、今、使われている薬の標的となっていない分子で髄腫がどのように生存増殖しているのか、それを阻害することで腫瘍にダメージを与えられないかと考え、ミトコンドリアに着目して研究を行いました。エネルギーを生成する働きをもつミトコンドリアは、悪性腫瘍ではその働きは落ちると言われていますが、完全に機能しなくなるわけではないので、骨髄細胞にどのような影響を及ぼすか、検討を重ねています。

研究に邁進できる環境が魅力
臨床では学会発表の機会も

この研究室を選んだ理由について「診療だけでなく、研究にもかなり力を入れていて診療科だったから」という原さん。「安倍先生にご配慮いただき、大学院生の間はどちらかというと研究に軸足を置いてできるようにしていただいています。

ミトコンドリアに着目した 骨髄腫の研究

内分泌代謝と血液を扱う安倍先生の研究室で、血液の腫瘍のひとつ、骨髄腫の研究を行う住谷さん。

臨床でも骨髄腫の患者さんに接し、薬がうまく効かないなど、治療の難しさを感じているそう。「少しでも患者さんの役に立ちたい」と、生物学や分子生物学への理解も深め、研究を通して自身の成長につなげたいといいます。

「臨床の方も忙しく、12月に『第6回日本糖尿病・生活習慣病ヒューマンデータ学会』、2022年には『日本老年医学会』などでの発表を予定しているそうで、充実した日々を過ごしていると話してくれました。

いいような新たな治療方法に繋がれば」と、ミトコンドリアを細胞から抽出し、別の細胞に移したり、移した側の性質が改善しないかといった様々なパターンを試しています。



研究室のみなさん。



歯学科や薬学部の先生も集まって行われるミーティング。こんなにいろいろな先生が集まる研究室はとても珍しいです。

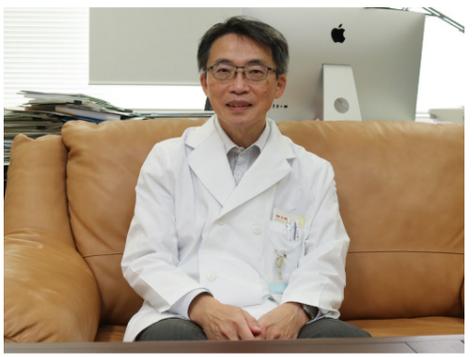
血液内科と内分泌代謝。まったく違う2つの診療科を扱っている理由は、この科の前身となった第一内科の「どんな患者さんでも診る」という診療スタイルにあるという安倍先生。臨床には診療領域、研究には研究領域という、いわば縦割りのな区分があるのですが、臨床も研究も垣根なく融合させることで、分野をまたぐ新しい研究領域やこれまでにない治療法の開発に繋がりたいと、融合から生まれるチャンスを大事にしているといいます。

この融合によって様々な分野や他大学に籍を置く若い先生達が集

まり、現在、大学の研究クラスターに採択された研究も進行しています。若い先生同士の交流も活発で、研究室には活気があります。「本来、臨床が忙しい科なので血液内科だけ、内分泌内科だけだったら研究が全然進まないと思うのですが、歯科の先生が骨代謝をやったり、分子生物学的な手法ができる先生がいたり、それぞれ力をいかし、役割分担して研究を行うことで、一人で研究を行うよりも早く、充実した研究を行うことが出来ています。」

他の学部からの受け入れを始め当初は、「血液内科にどうして歯学部が？」と言われることもあったのだとか。「歯科の先生が『血液の領域に論文を発表して、何のメリットがあるんだろう？』という人もいたのですが、最初に受け入れた歯科の先生の論文が米国血液学会誌『Blood』に掲載され、学位を取ることができたんです。このことがきっかけで次々に大学院生が派遣されてきて、それぞれ賞を取ったりして、評価を得ています。」

これまでも論文の作成や海外での学会発表などを後押しし、若い先生の味方になってサポートを行ってきた安倍先生。「臨床は決められたルールに添って治療を進



「点数で評価すると、点数のとれるようなことしかなくなる」と安倍先生の臨床実習はテストなし。テストなしはいいようですが、「何に向けてどうがんばればいいかが分からない」という声もあるのだとか。自分で考え、気付きを得ることを重視しています。